みんぱく 私の逸品

モンのスカート

標本番号 H0174469
地域 タイ王国
受入年 1990年

民博 外来研究員 宮脇千絵

九月一三日から開催される特別展「世界の織機と織物」には、世界各地のさまざまな型式の織機がずらりと並ぶ。そのなかに一九九〇年に収集されたタイに暮らすモンの腰機がある。この腰機と同時に収集されたのが、写真のスカートだ。手織りの布に装飾を施した、プリーツたっぷりの膝丈の巻きスカートである。

スカートをつくるためには、織り幅約二三センチメートル、長さ五〜六メートルの平織りの布を二枚使用する。一枚目は、ロウケツ染めを施し、スカートの中央部分に使用する。二枚目は、まず織り幅の半分、約一六センチメートルに裁つ。一方は藍染めをしてクロス・ステッチによる装飾を施す。これはスカートの裾部分になる。もう一方は、そのままスカートの上部になる。これらを縫製し、細かいプリーツをとる。モンの人びとはどちらかといえば、織りに趣向を凝らすのではなく、織りあがった布に装飾を施すことで意匠を凝らす。

わたしが調査研究をおこなっているのは、タイのモンのルーツでもある中国雲南省のミャオ族（自称モン）の人びとの服飾文化についてである。二〇〇七年以降、本格的に調査を始めたわたしは、残念ながら腰機を使用している現場をみたことがない。一九七〇年代には腰機に代わって、より楽な姿勢で作業ができる高機が普及したからだ。腰機には、屋内外の好きなところで作業ができ、作業しないときには小さく収納できるという利点があるものの、腰に負担がかかるし、来客や急な用事のときにすぐに対応できない不便さがあった。

腰機でも高機でも、織り上がる布に違いはないという。だが、モンが伝統的に使用してきた大麻繊維は、収縮性がないため高機にかけると切れやすい。そこでタテ糸に綿糸を使用することで、これを解決した。綿糸は一九八〇年代以降にモンの暮らす農村にも流通するようになった。さらに二〇〇〇年代以降は、化繊布の流通が拡大した。これはミシンで縫製し、プリーツをとるだけでスカートになるため、織りの作業自体が過去のものになりつつある。素材の違いによって製作時期を推し量ることのできるスカートは、モンの歩んできた暮らしの変化をも物語ってくれる。